

青木周蔵の中津滞在期～富永家所蔵史料を中心に～

大島, 明秀
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://hdl.handle.net/2324/2890>

出版情報：中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書. 5, pp.62-84, 2006-03. 中津市歴史民俗資料館
バージョン：
権利関係：

中津市歴史民俗資料館分館 村上医家史料館資料叢書Ⅴ

人物と交流 I

ヴォルフガング・ミヒエル編

青木周蔵の中津滞在期と富永家所蔵史料を中心に

大島 明秀

はじめに

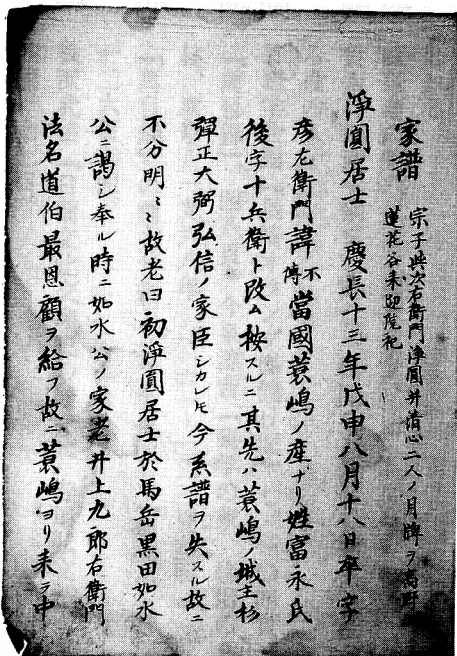
明治三二(一八八九)年、明治三二(一八九八)年の二度にわたって外相を務めるなど、日本の近代化に貢献した青木周蔵に関する研究は、『青木周蔵自伝』¹を校注した坂根義久の一連の研究²と、伝記小説という手法で青木周蔵を描いた水沢周³によって、その大半がなされてきたといっても過言ではないだろう⁴。

これらの先行研究が重視しているのは、主に外交官あるいは外務大臣を務めた時期で、つまり青木周蔵の政治家としての側面であり、その点については綿密に論考が重ねられてきているが、一方で青木周蔵の少年期にその学問的素養をはぐくんだ中津滞在期については、史料的な問題のためか『青木周蔵自伝』に記された以上は現在まで明らかにされてこなかった。

本稿の目的は、中津市で銃砲火薬店を営んでいる富永亮一氏が調査許可下さった富永家宛て青木周蔵書簡三通⁵、ならびに富永家の「記録」(図一、図二)、加えて富永家の親戚筋にあたる古門富太誌「中津酢屋富永家のこと」⁷、同「富永家のこと」⁸といった新出史料を用いて、これまで不詳であった青木周蔵の中津滞在期をより鮮明にすることである。



図一 富永家の代々の家譜や出来事を代々記した写本「記録」の表紙(中津市富永亮一氏蔵)。



図二 「記録」、一丁表(富永亮一氏蔵)。

一、青木周蔵の経歴

弘化元（一八四四）年一月一日、長門国厚狭郡小埴生村の医師、三浦玄仲と妻友子の間に長男が生まれた。幼名は団七、後の青木周蔵である。団七は一一歳の頃に玄明と改め、一四歳で宇部村の村学校「晩生堂」に入学、その三年後の万延元（一八六〇）年、密かに漁船に乗じて中津へと向かった。

一九歳で故郷山口に戻った三浦玄明は、二〇歳の春より藩校明倫館好生堂に通い、翌年青木家の養子となつて青木周蔵と改名することになった。慶応三（一八六七）年に長州藩より長崎留学を命ぜられ、翌年には医学就業のためにプロシア、現在のドイツに留学した。帰国後、木戸孝允（一八三三〜一八七七）の推薦によつて外務一等書記官心得となり、オーストリア、オランダ等の公使を経て、明治二二（一八八九）年に第一次山県有朋（一八三八〜一九二二）内閣で外相を務め、再度ドイツ公使、ベルギー公使兼任などを経て、イギリスとの条約改正交渉を行い、一八九八（明治三二）年には再び外相となる。また、二度目の外相を辞任してからも駐アメリカ公使として活躍するなど、大正三（一九一四）年に七〇歳で亡くなるまで、世界を股に掛けて日本の発展に尽力した¹⁰。

また、私生活では明治一〇（一八七七）年にドイツ貴族の娘、エリザベート・フォン・ラーデ（Elisabeth von Lade、一八四八〜一九三二）と結婚した。これによつて青木はヨーロッパの貴族社会の大きな信頼を得、活躍の場を広げた。しかしながら、これよ

り先に青木周蔵は慶応元（一八六五）年に青木研蔵の養子となつて研蔵の娘テルと婚姻関係にあつたが、明治七（一八七四）年に離婚話もちあがり、それとともに青木家の養子問題を引き起こすことになった。その際、同郷萩出身の木戸孝允の助言もあり、青木は青木家の養子のままテルと離縁する形を採つた。エリザベートとの間にはハナ（一八七九〜一九五三）という娘が生まれ、ハナはドイツの伯爵と結婚した¹¹。

このように外相あるいは外交官として活躍した青木周蔵の、若き日にその素養をはぐくんだ中津滞在期は一体どのようなものであつたのだろうか。

一、「青木周蔵自伝」に見る中津滞在期

青木周蔵¹²の中津滞在期を伝えるものとして自伝がある。前述した坂根義久校注『青木周蔵自伝』は全二七回からなるが、青木の中津在藩時の様子を伝えるのは、「第一回 長州在藩時代」である。この中で青木が学問を志し、それが中津へ向かう契機となつたことについて触れている。

予の実父は、所謂蘭方医にして、翻訳書に依り少しく泰西文明の學術を解せしが故に、解剖学、生理学及び物理学等に就て、時々、予に教示する所あり。予の年、満十六歳に達せし時は、漢学の知識、四書の素読を為し得るまでに進みしと共に、一方に於て、此等泰西學術の一端に触るるに至りたるを

以て、将来修学の方針に就ては、恰も五里霧中の感なきにあらざりしも、幸に身体比較的強健なりしが為め、僻地に踟蹰して、医を学ぶが如きは何となく物足らぬ感ありたり。且、勿論、確たる方向を定め得たるには非れども、何とかして国家に益する学問、即ち、政治に関係ある学問を修め、漸次政治に参与すべき位置を得んとする感念、模糊として腦中に生ぜり。然るに、之に必要な学問は、程度低き宇部の学校にては修むること能はず。左りとて、藩学に入ること能はざる身分なれば、如何にして此の目的を達すべきか、左思右考の末、遂に笈を他国に負ひ、階級制度に関係少なき地を撰び、修学せんと決心し、齡十七歳に至り、豊前中津に赴けり¹³

自伝によれば、青木の父は蘭方医でヨーロッパの学問の素養があり、その関係で解剖学、生理学および物理学について教示される所があつた。一六歳まで青木は四書の素読ができるようになるまで漢学の知識を身に付け、その一方では父の影響からヨーロッパの学問にも触れる機会があつた。しかしこの時まだ進路については定まっていなかつた。その後医学ではものたりず「国家に益する学問、即ち、政治に関係ある学問」を修めようと思ひ至つたが、郷里宇部の村学「晩生堂」は学問の程度が低く、また、青木は藩校に入学できる身分でもなかつた。そこで一七歳の時「階級制度に関係少なき地を撰び、修学せんと決心し」て中津に向かつたという。

予の此の行、豊後日田に至り、広瀬淡窓の塾に入らんとする志なきにあらざりしも、未だ此の方向を確立したるに非ず。唯、中津は予の郷里の対岸に在るが故に、兎も角も此の地に渡航せしが、予は中津に至り、巨大なる一城郭を見るに及び、忽ち日田行の不可なるを悟るに至れり。中津は堤封十萬、奥平大膳大夫の城下なれば、生来未だ曾て城郭を見たることなき予は、竊に謂へらく、広瀬淡窓は処士にして、日田の地たる亦、城下に非ず。此の如き地に僻在し、此の如き人に就て学ぶは、医となり、或は僧となる者の為めには適當なるべきも、隠者的の学問を修むるは我将来の目的に非ず。之に反し中津に於ては、奥平家の藩校も設置あるべく、又、他所の学者もあるべし。若し藩校に入ることを得べくんば、此に止まりて奥平家の藩士と交はらば、便宜多からんと信じたり¹⁴

青木周蔵が当初目指していたのは中津ではなく「豊後日田の広瀬淡窓の塾」であつた。中津は郷里宇部の対岸にあつたから渡つたのであつた。しかし、一旦中津の地に足を踏み入れた途端、そのあまりの城郭の大きさに圧倒された。青木は、日田が城下町でないこと、中津は奥平氏の城下町で藩校（進脩館）もあり、中津のみならず他所からやつて来る学者も多いであろうことから、「若し藩校に入ることを得べくんば、此に止まりて奥平家の藩士と交はらば、便宜多からん」と考え、当初の日田行をやめ、中津に滞在することを決めたという。

水沢周はこの青木の言に異を唱えている。中津へ行くことを決

意した四年も前に広瀬淡窓が亡くなり「咸宜園」の主宰が旭窓に代わったことを根拠として、日田の地がそれほど強く青木を吸引したとは考えにくく、むしろ幼年時代から抱いていた、海の彼方の国への漠然とした憧れこそが正直な気持ちではないかと指摘している¹⁵。

左れば、今日より追想すれば、実に抱腹に堪へざる事なれども、先づ城下の入り口にある番所に至り、突如番卒に向ひて、先づ自己の氏名を告げたる後、「自分は此の地に於て、修学せんが為めに來たる者なり。敢て問ふ、城下著名の学者は何人なるや。」と質したるに、番卒曰く、「何人か学者なるや、我等之を知らず。又、学塾は二、三を数ふるも、何れが果して優れるや、是亦、予等の解せざる所なり。」と。予は此等、番卒の長は必ず一個の藩士なるべく、之に面会せば要領を得るならんと思惟し、乃ち番卒を通じて面会を求めたるに、暫くありて、福永某（或は福田某）出でて面接せり。仍て、予は前言を反覆して質問したるに、「朱子学派にしては某、徂徠学派にしては手島仁太郎あり。」と答へたり。依て、直に手島氏を訪ひ、「予は医家に生れたれども、単に医学を修むるを以て満足する能はず。将来、他の學術を修めんと欲する者なり。貴塾に於て教ゆるものは、抑々如何なる学問なりや。」と、盲者蛇を恐れず的に質問したるに、手島氏は懇に徂徠学派の大綱を示し、「最も力を四書五經に致す。」と、言へり。予は其の最も力を四書五經に用ゆるは、正鵠を得たる修学の

方法なりと信じ、且、手島先生の懇諭に悦服し、直に束脩を納めて入門せり。是れ実に万延元年三月なり¹⁶。

中津に降り立つた青木周蔵が初めにとつた行動は実に突飛なものだった。城下の入り口にある番所で自分の名前を告げ、突然「自分は此の地に於て、修学せんが為に來りたる者なり。敢えて問ふ、城下著名の学者は何人なるや」と問いかけたのである。結果として徂徠学派の手島仁太郎（物齋）¹⁷のことを認識した。青木は直に手島を訪ね徂徠学とは何かと質問したところ、手島は「最も力を四書五經に致す」と回答した。青木は当時「最も力を四書五經に用ゆるは、正鵠を得たる修学の方法」と信じていた上に、手島の「懇諭に悦服」したことから、手島に直に束脩を納め、その私塾「誠求堂」¹⁸に入門した。実に万延元（一八六〇）年三月のことであつた。

「誠求堂」に入塾してから文久元（一八六一）年の六、七月頃まで、青木はここで勉学に勤しむ日々を送るとともに、手島仁太郎の弟で福沢諭吉の親戚にあたる橋本忠次郎と運命の出会いを果たすことになる。関係箇所の記事は以下のとおりである。長くなるが全文を掲げる。

再後、予は文久元年六、七月頃まで、手島塾に在りて刻苦勉強せしに由り、意外にも早く已に高弟の班に列せんとするの際、不幸にして手島氏は突如長逝せり。同氏は藩学の教授たると同時に、私塾を開きて四、五十人の塾生を寄宿せしめ、

別に多数の通学生を教育せしを以て、当時、俄に塾を閉づること能ざるを以て、其の実弟橋本忠次郎氏、該塾を継承することとなりしが、其後、經書の講究を漸次疎となり、盛に歴史を講ずるに至れり、蓋し橋本氏の意、「学問は活学問ならざる可らず。従て經書講究の如き、勿論必要なるも、其は大概の程度に止め、古今内外の治乱興亡の蹟を知るべき歴史の講究に力を注がざるべからず。」と云ふに在り。又、先師手島氏は經學者なりしも、能く詩を講じ、自身、亦、雅懷を詩賦に寄すること深く、重に唐、宋の詩を講じ、初学の解し易き近世人の詩の如きは棄てて顧みざりしに反し、橋本氏は、主として初學者の解し易き詩賦を講じ、又、盛に作文を奨励する等、先師の意向とは全く正反對なりし。此時、予は尚ほ十八歳の弱年にして、充分兩者教授の長短を判別するに能はず、半信半疑の間にありしも、橋本氏の所説は意氣活潑に富めるを以て、予は遂に之に帰依するに至れり。又、同年の事なりと思ふ。江戸より中津に着したる某氏の書翰中、前年、江戸に起りし一大疑獄の詳況を報じ、且、当年志士の一人として処刑せられたる頼三樹三郎の、「排雲欲手掃妖熒、失脚墮來江戸城、云々。」と、詠ぜし、彼の有名なる七律一首をも添附し來りたるが、橋本氏は、一日特に予を招きて之を示し、「此の詩の作者たる頼三樹三郎は、実に學識に富める有為の士なり。此の如き名士を殺戮したるは、真に徳川氏滅亡の前兆なり。」と云へり。此の一事、痛く予を感動せしめ、世勢如何に成り行くべきやと、天下國家の將來に關し始めて幾多

の疑惑を抱かしむるに至れり。同年或は其の翌年のことなりき。橋本氏は偶然、予に語りて曰く、「予の親戚に福沢諭吉なる者あり。今回、幕府より北米合衆國に派遣せらるる使節に隨ひ、同國に赴くこととなりたるを以て、告別の為め、現に中津に在住する其の母に一書を贈り、添ふるに金百兩及び自己の写真を以てしたり。」と云ふ。予は未だ曾て写真なるものを見たることあらざれば、「今より福沢の宅を訪ひ、彼の書翰と共に請ふて一見せんと欲す。足下同行せずや。」と。予は、喜んで隨行を請ひ、相伴ふて福沢氏の宅に至りたるに、福沢氏の母は諭吉氏の書翰を橋本氏に示し、写真は予にも一見せしめたり。是れ、予も亦た、写真を見たる嚙矢なりとす。席上、橋本氏と福沢老母との談話を仄聞するに、福沢氏は曩に亡命して江戸に至り、頃日拔擢登用せられ、「重大なる使命を帯びて米國に赴く使節に隨行を命ぜられたれば、任務を全ふして帰朝せんことを期す。」と報じ來れるものの如く、之を聞ける予は、胸中自ら一種の感慨なき能はず。其の後、知人に就て福沢氏従来の経歴を質問せるに、彼は中津藩老、奥平壱岐氏に隨從して、長崎に派遣されたる留学生なりしが、事故に依り帰國の途中、脱走して大阪に至り、緒方洪庵の門に入りて蘭學を修め、終に塾頭となり、後、更に江戸に遊學して英書を修めたることを知り得たり。此の時、予は、福沢氏こそ我が學ぶべき人なり。福沢氏の為せし修學の方針に倣ひて努力せば、必ず目的を達すべしと信じたり。而して、中津城下には蘭方医にして蘭學に通ずる者あるべきを以て、我

が目的を達せんとせば、先づ交を医家に結ぶこと必要ならんと思惟したるが、此の事、固より橋本氏に秘して行ふべきにあらざるを以て、予は一日、氏に対し、「歴史の研究は依然怠らざるべきも、而かも蘭学修行の事、亦、自分の素志にして、今より福沢氏の方針に倣ひ、蘭学を修めんとする希望なるに由て、知名の医家に紹介せられんことを乞ふ。」と懇願せしに、氏は典医其の他の大家と相交はること深からざりしが故に自ら紹介の勞を取らざりしも、藩中、蘭学に通ずる者の氏名を告げたるを以て、予は一々、之を歴訪せり。其の人々は大江久、神尾雄策、藤本玄岱諸氏にして、就中、大江氏は漢学の素養に富み、併せて多少蘭書を学び、文典の如き略ぼ之を解し得るを以て、予に之を教授すべく、又、所要の書籍をも貸与すべしとのことなりしを以て、予は直に大江氏に就て蘭学の講習を始めたるも、氏の蘭学の知識たる頗る浅薄なりしを以て、予の学業も亦、進むこと能はざりき。以上三人の外、尚ほ蘭方医ありて、自宅或は藩校に於て蘭書の翻訳書たる『気海観瀾』『医範提綱』等に依り、蘭国の學術、特に主として物理学及び医学の階梯を講習せしに由り、予も亦、講習生の伍伴に入り泰西學術に關し少しく知識を増進したると同時に、漢学を以てしては到底将来の活世界に処する能はざるを悟り、今後は一意専心、蘭学を研究すべき決心を為すに至れり¹⁹

「誠求堂」は寄宿塾生四、五十人を数える規模の私塾であった。

青木は手島の下で勉学に励んだ。文久元年（一八六一）に手島塾の高弟の班の中のひとりとなり、上等二級会頭、塾長代理になった。しかし、その年に残念ながら手島仁太郎が急逝し、実弟の橋本忠次郎が塾を継いだ。

橋本忠次郎は青木に或る出会いをもたらした。橋本は福沢諭吉の親戚であり、或る日福沢から母親に届いた書簡に同封されていた写真というものを見せてもらいに行くので、青木も同行しなかつた。そこで橋本と福沢老母との談話から福沢諭吉の活躍を聞いた青木は興奮し、「福沢氏こそ我が学ぶべき人なり。福沢氏の為せし修学の方針に倣ひて努力せば、必ず目的を達すべし」との確信を得た。そこで橋本忠次郎に「歴史の研究は依然怠らざるべきも、而かも蘭学修行の事、亦、自分の素志にして、今より福沢氏の方針に倣ひ、蘭学を修めんとする希望なる由て、知名の医家に紹介せられんことを乞ふ。」と蘭学者の紹介を頼み、紹介を受けた大江久、神尾雄策、藤本玄岱等を訪問した。中でも或る蘭方医は自宅や藩校で『気海観瀾』²⁰・『医範提綱』²¹等を用い、「蘭国の學術、特に主として物理学及び医学の階梯を講習」していた。青木はこの蘭方医の講習生の一人となり、世界で活躍していくためには漢学ではなく蘭学が必要であることを悟り、以後蘭学のみを打ちこんだ。

斯る状況の中に、予の齡十九歳の末となりしが、世は尊攘の議論益々熾盛となり、殊に長藩に於ては幕府の因循なる態度に反し、閩門通過の外国船舶を砲撃する準備を為す等、漸次

人心を聳動する形勢となれり。之が為め、長人は深く幕府及び其の譜代各藩の忌む所となり、従て中津藩に於ても、長人たる予と、同藩士との交際は親密を欠くの情況あるに至りたれば、予は終に中津を辞して郷里に帰れり²²

青木周蔵は中津で一九歳を迎えた。この頃尊王攘夷運動の気運が高まり、特に長州では幕府の外国に対する態度に反発し、独自に外国船を砲撃する準備をしていた。そのため長州は、幕府や譜代各藩の忌諱に触れるところとなり、青木もまた中津藩士との交際が薄れる事態となり、その後郷里に帰った。結局青木が中津に滞在した期間は、万延元（一八六〇）年三月から文久三（一八六三）年のおよそ四年間であつた²³。

三、青木周蔵と中津藩の学者

自伝には青木周蔵が中津滞在時に接触した学者が六人登場する。儒学者手島仁太郎、福沢諭吉の親戚である橋本忠次郎、漢学者（蘭学者）大江久、神尾雄策、藤本玄岱、そして名前は記されていないが蘭方医で「自宅或は藩校に於て蘭書の翻訳書たる『氣海觀瀾』『医範提綱』等に依り、蘭国の學術、特に主として物理学及び医学の階梯」を教授し、青木が進んで講習生となった人物である。彼等について少しく述べる。

（ア）手島仁太郎

手島仁太郎は別名を柯、号を物斎という。物斎については「御家中系図 嘉永三年改」²⁴中にその経歴が見え、「豊前人物志」でその記述が用いられ物斎が紹介されている。以下、両史料に基づいて手島の経歴を概観する。

物斎は文政五（一八二二）年十一月に「幼年之處學問出」²⁵という理由で、「御褒美銀貳両」を拝領した。ここから物斎が若年から才能を発揮していたことが窺える。同一〇年一〇月七日「學館句投」²⁶を、同一二年五月一日「學館塾生」²⁷を勤めるよう仰せを受けた。

天保五（一八三四）年二月七日に「心懸宣」²⁸きことから無給ではあるが召し出され、「勤方御用所御取次」²⁹を命ぜられ、同六年七月二八日には「御用所仮御役學館取切」³⁰、八月には「表御用書」³¹を、さらに同七年五月二四日には「御仕法替二付御用人衆御用書學館御用書兼」³²で勤めるよう申し付けられた。この年二月二八日「御扶持方貳人扶持内壹人扶持名目」³³を仰せ付けられた。

天保八（一八三七）年五月一八日「學館御用書取切」³⁴を命じられた。そして同年二月二五日「無給二付當暮計金貳百匹」³⁵を拝領した。同一三年四月四日「格式御供小姓學館引立」を仰せ付けられ、「學館御用書取切」³⁶を罷免された。しかし、弘化四（一八四七）年二月一五日「家督無相違勤方」³⁷を、これまでの通り勤めるよう命を受けた。同年同月十八日「御儒者見習書物料暮々銀二枚」³⁸を拝領した。

弘化四年九月一七日「御詩會御相手并不時講御聽被遊候節罷

出³⁹」るよう仰せ付けられた事項を最後に、「御家中系図 嘉永三年改」中に物齋の記述はなくなる。物齋はこれより少し後に隠居し、私塾「誠求堂」に専念したのであることが推察されるが、最後の記述が示す弘化四年九月一七日より文久二（一八六二）年八月に五一歳で没するまでの約十四年間については全くの不明である⁴⁰。

（イ）橋本忠次郎

橋本忠次郎は別名を晶、号を鹽巖といい、前に挙げた青木周蔵の自伝から手島仁太郎の弟で同時に福沢諭吉の親戚であったことが分かり、「御家中系図 嘉永三年改」によって橋本濱右衛門久健の養子になったことも確認できる⁴¹。橋本忠次郎については『下毛郡誌 全』⁴²にまとまった言及がある。

橋本鹽巖は手島物齋の弟なり、鹽巖は其の號後以て通稱とす、出で、橋本氏を嗣義ぎ其の姓を冒す早く兄物齋と共に山川東林に従ひ學び、又熊府に遊ぶ、既にして業就り中津に歸り、進脩館の教授に任ぜらる、廢藩後鹽巖自ら誠求堂を再興す、從遊の門人甚だ多し、明治五年一月片端中學校成る、鹽巖乃ち白石常人大久保麿山の二儒と共に入つて教授となる、同八年十一月更に養成校の教授となり、又市學校の授業をも兼務せり、其の間塾生をも教養すること終始一日の如し、同十五年五月十五日病んで家に歿す、享年六十七、鹽巖長身緒顔頗る威容あり、性最も謹嚴剛直なり、常に詩賦文章を以て末枝となし、専ら窮經譜史を尚び、實用を以て主となす、故に塾

規には詩會を毎月初四、十四、二十四の三日に、文會を初九、十九、二十九の三日に限りたり、鹽巖漢書を耽讀し竟に數卷を抄寫し、大に人を驚かしたる事ありと云ふ、其の著書には鹽巖書牘鹽巖雜文及鹽巖後集あり⁴³

（ウ）大江 久

自伝に登場する漢学の素養があり蘭学も習っている大江久という人物について、坂根は『中津バスタード』⁴⁴の編者である大江春塘（一七八七～一八四四）だと指摘している⁴⁵。確かに大江春塘の名は久であるが、青木の大江久と接触した時期は、少なくとも万延元（一八六〇）年から文久三（一八六三）年の間であり、大江春塘の没年（一八四四）と合致せず事実上ありえない。

ここでは二つの可能性が考えられる。まず一つは青木周蔵の偽作あるいは記憶違いで、もう一つは春塘ではない大江久がいた可能性である。青木の中津滞在期に健在であり、漢学と蘭学を修めていた大江姓の著名な学者としては、中津藩医大江玄明（一七九九～一八七七）、同じく同じく中津藩医を勤め後に中津医学校長ともなった大江雲澤（一八二二～一八九九）などが考えられるが、玄明、雲澤ともに名は久ではない。現時点で青木のいう大江久が実在の人物かどうか、あるいは実在していたならば誰なのかを特定することはできない。

（エ）神尾雄策

神尾雄策については、『下毛郡誌 全』、『中津歴史』⁴⁶ および

『扇城遺聞 郡誌後材全』⁴⁷に僅かに触れている記述がある。

神尾藤本等諸醫は皆京都の小石玄瑞門下より出たれども、歸藩するに及んでは盡く春塘玄水二人の指導を受けた⁴⁸

村上氏「『玄水』ハ……」大ニ蘭方ノ秘訣ヲ極メ而シテ後寛政ノ初年藩聽ニ乞テ重罪ノ屍ヲ得自門下數拾人ヲ率ヒテ刑場長濱ニ到リ之ヲ解剖シテ畫工ニ其状ヲ畫カシメ因テ之ニ臟腑脉絡ノ説ヲ次シテ一書トシ名ケテ解剖圖説ト云万里帆足翁ノ序文アリ蓋當時人身解剖ヲナセルモノ九州是ヲ以テ始トスベシ當初兵學ヲ窮ムルノ故ヲ以テ實ニ當市烟火術ノ開祖ナリト云爾來藤本箭山神尾雄策久松法菴等相踵テ蘭方ヲ採用シ遂ニ維新ノ後ニ及ビテハ多クハ洋方シオミトナリシガ是ニ至リ醫學校病院ノ開クルヤ當市ノ醫事上ニ一新時期ヲ興シ來レル者也⁴⁹

藤本箭山は「……」文久元年二月村上玄秀、原岡平泉、西千枝、神尾雄策等と相議して醫學館を上勢溜に開き⁵⁰

この記述から分かるのは、神尾雄策が京都の医師小石玄瑞（一七八四〜一八四九）門下で学び、中津に帰藩して村上玄水⁵¹（一七八一〜一八四三）や大江春塘に師事した医者で、中津医学館創設に尽力した一人であったことである

その他の史料にも神尾の名が見える。川寫真人の指摘によれば、

松山均氏所蔵の『惣町大帳』という記録に、嘉永二（一八四九）年三月に藩医辛島正庵（一七七九〜一八五七）を筆頭に、西周哲、横井玄伯、神尾雄朔、藤野啓庵（東海）、藤本玄泰、小幡竜洲、松川清庵、原岡平泉、久松方庵等の十名の中津藩の医師が長崎に痘苗を入手しに行ったことや、さらに同年一二月には、神尾雄朔と藤野啓庵が藩主奥平昌服に種痘を請願し、それによつて藩のおふれで種痘が無料で実施されたことが確認できる⁵²。ここから神尾雄策は中津における種痘の導入に尽力した一人であったことが明らかになった。

（オ）藤本玄岱

藤本玄岱は箭山ともいい、神尾雄策について引いた記述にも登場した。今一度述べると、藤本玄岱は嘉永二年三月に長崎に痘苗を入手しに行った十名の医師のうちの一人であり、同年一二月の神尾雄朔と藤野啓庵による請願書の中で、久松方庵とともに実際自分の子に痘苗を試した町医者であった⁵³。また、先に引用した『扇城遺聞 郡誌後材全』にも藤本玄岱についての記述が見える。

神尾藤本等諸醫は皆京都の小石玄瑞門下より出たれども、歸藩するに及んでは盡く春塘玄水二人の指導を受けた⁵⁴

藤本箭山は玄岱と稱す、少壯の頃帆足萬里の門に學ぶ、文才英發、人之を呼んで冬嶺の孤松と爲す。後大阪に遊び醫を緒方洪庵に學ぶ、數年業成て中津に歸るや、醫方努めて洋式に

従へり、文久元年二月村上玄秀、原岡平泉、西千枝、神尾雄策等と相議して醫學館を上勢溜に開き舊來漢方の醫藥を改良せんと欲し、先づ一著手として一般に牛痘の功驗を知らしめ、又解剖を行ふ等の事あり、蓋し藩聽の許可を受けざりし廉にて遺責を蒙り、閉門を命ぜらると云ふ箭山又詩書に巧みに、其の書の如きは往々頼山陽の筆致に酷似せるものあり、箭山の二子壽吉夙に帝國大學に學び、工科大學第一回の卒業生たり、壽吉最も好古學に精通し、帝室離宮を始め、大廈の造營其の手に成れるもの多し、然れども不幸にして早世す、箭山は明治十一年歿す、享年六十三なり⁵⁵

藤本玄岱は少壯の頃帆足万里に學び、その後上京して小石玄瑞門下を出て帰郷し、玄水・春塘に學び、神尾雄策らとともに中津における種痘の導入に奔走し、さらにその後中津医学館創設に貢献した人物であった。その他漢方薬の改良、牛痘の効目の宣伝、解剖の遂行なども行つた。明治一一（一八七八）年に享年六三歳で死去した。

（カ）蘭方医（無名）

この蘭方医の名はなぜか自伝には記されていないが、前に挙げたように「自宅或は藩校に於て蘭書の翻訳書たる『氣海觀瀾』『医範提綱』等に依り、蘭国の學術、特に主として物理学及び医学の階梯」を教授し、青木が進んで講習生となった人物である。自伝から三つの情報が分かる。まず一つはこの人物がいわゆる

蘭方医であったこと。次に藩校で教授していたこと。最後に物理学的文献である『氣海觀瀾』および解剖学的文献である『医範提綱』等の文献を理解し講釈するなど、基本的な西洋物理学および医学に通じていたことである。

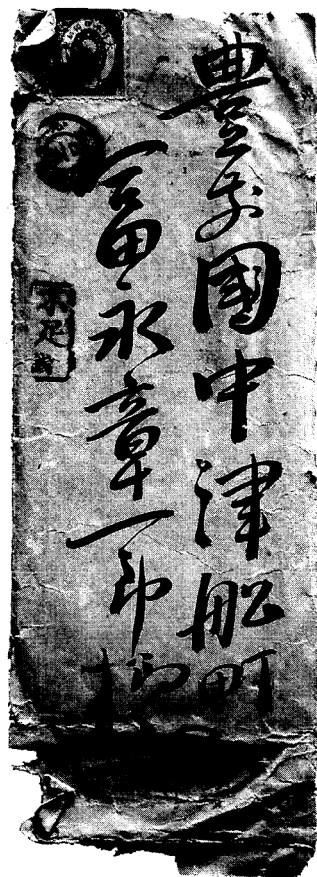
これらの可能性を満たす人物としては、中津藩医であった村上家や大江家の人物が考えられ、時代的には村上家八代目春海や大江家五代目雲澤が可能性として挙げられよう。村上医家史料館には「氣海觀瀾」⁵⁶・「医範提綱」⁵⁷ともに現存し、その他七代目玄水自筆の天文・物理・医学関係の写本や帆足万里史料も豊富に存在していることから、八代目の春海が医学のみならず西洋物理学を学修していたことは想像に固くない⁵⁸。一方、大江家には「医範提綱」⁵⁹およびその他の医学史料が認められるものの、「氣海觀瀾」などの天文・物理学関係の史料は確認できない。すなわち青木が学んだ蘭方医は村上春海である可能性が高い。しかしながら、村上春海と断定する史料は現在のところ不在であり、現時点ではあくまで推測の域を出ない。

四、富永家所蔵史料に見る青木周蔵の中津滞在期

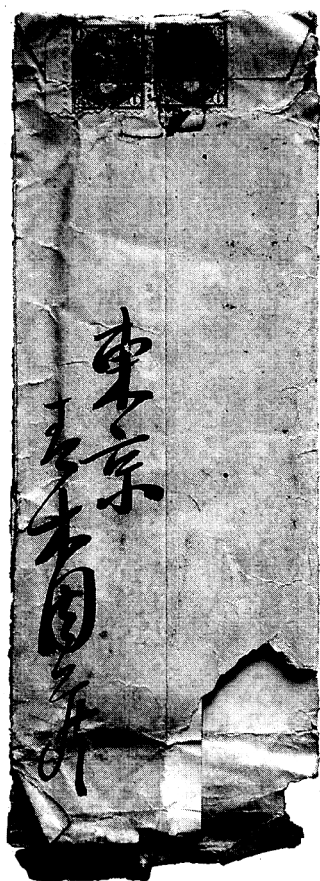
『青木周蔵自伝』には「誠求堂」を出てから中津の蘭学者を歴訪し、長州に帰るまでの間、青木が中津のどこに拠点を置きどのような行動をしていたのかについては触れられていない。

中津市在住の富永亮一氏は、富永家に宛てた青木周蔵書簡三通を所蔵している（図三～図九）。この史料の出現により、氏の祖

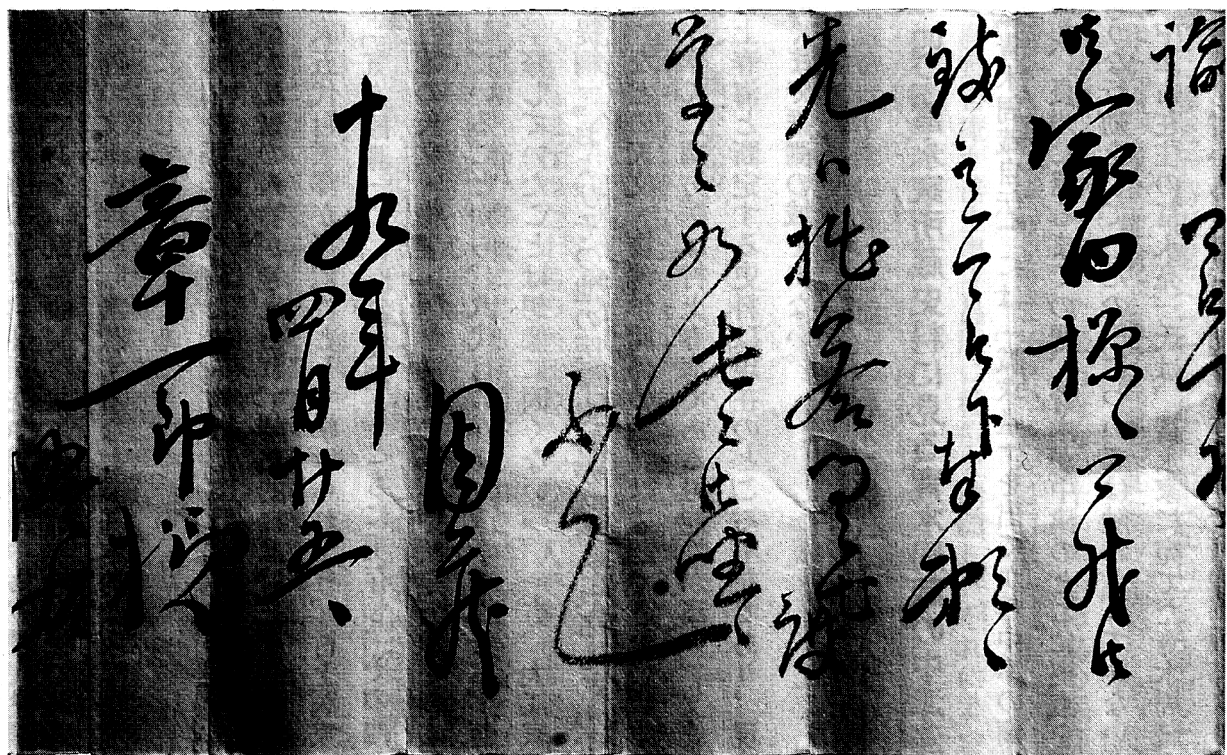
先と青木が関係を持っていたことが判明した。富永亮一氏は現在銃砲火薬店を営んでいるが、江戸時代に薬、火薬などを扱った豪商富永家の第十八代目でもある。



図三 明治十九年四月二十五日付、富永章一郎宛て
青木周蔵書簡封筒（富永亮一氏蔵）。



図四 同書簡封筒裏（富永亮一氏蔵）。



図五 同書簡（富永亮一氏蔵）。

一通目の書簡は、明治一九（一八八六）年四月二五日に青木から富永家第十四代目章一郎（別名酢屋彦三郎）に宛てられたものである。当時、青木周蔵はドイツ公使を経て外務次官の役職についていた時期である。内容は同年四月一三日に富永章一郎から青木に送られてきた手紙の返事であり、内容は、富永章一郎の息子である睦郎の上京を、不都合から遠慮願いたいというものである。（以下、三通の書簡は読みやすいように筆者が改行、読点をほどこし、日時の古いものから順に並べ番号を付す。）

① 明治一九年四月二五日 富永章一郎宛て

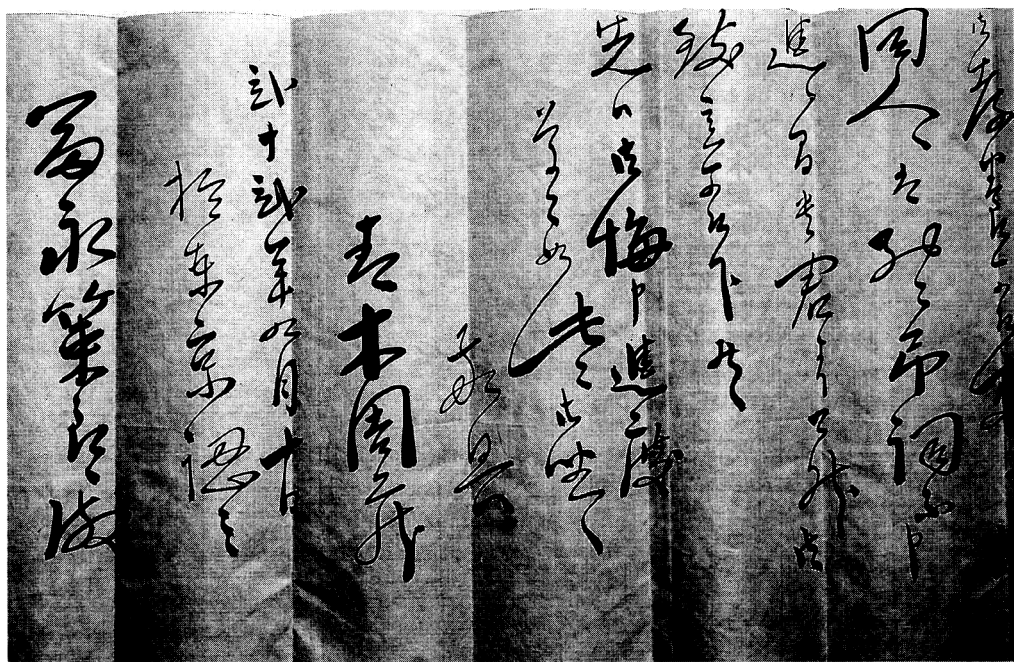
本月十三日之貴書、兩三日前接手無恙御帰郷相成候との賀々、尤船中より少々眼痛ニ而、御困却被成候由災止此事ニ御座候、誠ニ先達而御上京之節ハ、為何風情も無之都合たり志ニ付、百里外ニ尋問セシ甲斐も無之と、嘸々御後悔被成候、半氣之毒に奉存候、横須賀へ御出之節ハ、伊藤・坪井両氏共不存ニ而、何故御不如意之事而已有之候由、萬々氣之毒ニ奉存候、併シ鎌倉地方へ御遊覧之際ニハ、萬端御都合克敷珍貨宝器等御一見相成候由賀候、令息睦郎子身上之義ハ萬々相合居候得共、目今之情勢ニ而ハ強而東京江呼寄候義、却而不都合ニ可有之候間、差当り縣地ニ而骨折候様御説論可被下候、御家内様へ可然御敬意可被下奉頼候、先ハ拙答差出度草々如此御座候

不一

周蔵

十九年四月二十五日 章一郎様 梧右

封筒に金銭不足の印が捺されているのは愛嬌である。
二通目は、明治二二（一八八九）年九月一〇日に青木から富永家第十五代目策郎に宛てた書簡で、青木が十一月に外相代理、十二月に外務大臣になる直前のものである。策郎の父章一郎が亡くなったことへのお悔やみの手紙である。



図六 明治二十二年九月十日付、富永策郎宛て青木周蔵書簡（富永亮一氏蔵）。

② 明治三二年九月一〇日 富永策郎宛て

尚々老父母より可然御悔可申進旨、呉々も申付候間、可然御
含可被下候、本月五日之哀訃昨日到来、御親父様御義久敷肺
部之疾二御罹り居被成候処、御保養不相叶終二黄泉へ御旅行
被成候との御事、誠二驚愕いたし申候、最初御病氣二而有之
候事も夢二承知不致候二付、御見舞状も不差進萬々遺憾二存
申候、母上様其他皆々様共嘸々御愁傷之義と遠方より洞察罷
在申候、此上ハ母上之御身二御病氣不相起候様、何卒々々
御孝養可相成候、御同人へは初二弔詞不申進候間、貴君より
可然御致意可被下候、先ハ御悔申進度草々如此御座候

敬具

青木周蔵

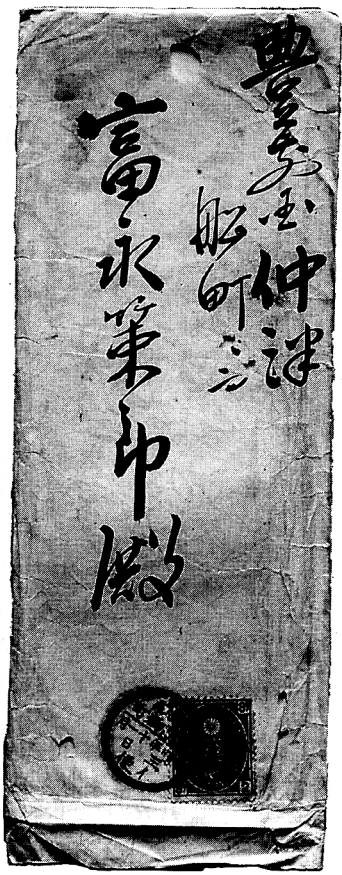
式十式年九月十日

於東京認之

富永策郎殿

三通目は富永策郎に宛てた明治二四（一八九二）年一月二日
付の書簡である。五月に外相を辞任した年に送られたもので、内
容は、富永策郎の息子逸次の大学校進学を相談したことに対し、
青木は、大学校進学には高等中学校を修了した経歴が必要なこと
を説明し、それには時間と金銭が大いに必要であるから現実的に
難しいであろうことを述べ、結論として逸次の大学校進学を断念

し専門的な一科目を身に付けさせ、一日も早く自立させる道を勧
めたものである。



図七 明治二十四年十一月二日付、富永策郎宛て
青木周蔵書簡封筒（富永亮一氏蔵）。



図八 同書簡封筒裏（富永亮一氏蔵）。



図九 同書簡（富永亮一氏蔵）。

③ 明治三十四年二月二日 富永策郎宛て
逸次子出京之節、御投与之書帖并二十月廿五日附之細書共正
二領収、時下秋冷弥増候得共、貴君并北堂君其外様御益御多

祥之由、重量新賀ニ御座候、陳逸次子之可修学科之義、再度までも縷々御申越相成、一応承知いたし候共、到底大学校ニ於而、規定通之専門的諸学科を修るニは、先高等中学之試考を經たる者ニ無之ては不相成候処、逸次子は不幸ニも高等中学之試験を經たる人ニ無之候放、所謂高等なる専門学ニ従事するわけニハ参兼申候、且来諭之趣ニては数年間ヲ期シ、十分なる学資も御仕送難被成故ニ椎奉いたし候間、所謂早道のニ容易なる一学科を修メさせ、一日も速ニ自分之腕前ニ而糊口シ得る人と相成候様勸諭罷在申候、要するニ府下ニ滞在する中等之学生ハ、毎年百乃至百式十円之学資を必需する振合ニ御座候間、逸次子ヲシテ今より中学ニ入り遂ニ大学門ニ進ミ終ニ規定之試験ヲも經過セシムル事ニいたし候得者、七八ヶ年之内ニ学資金壹千円ハ御仕送無之ては不相叶候、之ニ反シ前段ニ述置候通り、早道学問ニ而一科目を修メシメ候得は、式年餘間ニ式百餘円之金子有之候而事足可申候、貴君ニ於而は、前述之事情あるニも係らず別ニ御考可有之故、否サレハ右早道学問ニ一契する云々、逸次子へ篤与可申聞候間、至急ニ何分之義御申聞可被下候、北堂君へ可然御致意可被下候先ハ為其

草々不一

周蔵

式十四年十一月二日夜 策郎様

これら三通の書簡から、青木が何らかの形で富永家、特に第十四代目章一郎と深い関係にあることが判明したものの、具体的にどのような関係であったのかは定かではない。

青木周蔵と富永家の関係をさらに探る史料として、富永亮一氏はその他数種の写本類を所蔵しておられ、中でも富永家の代々にまつわる出来事、商売記録などが記された「記録」という一次史料、さらに富永家第十六代目佐近の従兄弟にあたる古門富太が、明治二八（一八九五）年に記した「中津酢屋富永家のこと。」および「富永家のこと。」が該当資料として挙げられる（図一〇、一一）。

まず、「記録」であるが、本文献は一〇〇丁にもなる重厚な写本であるが、残念ながらこの中に青木周蔵（三浦玄明）の名は確認できなかった。

次に、明治二八年「中津酢屋富永家のこと。」および「富永家のこと。」の二写本であるが、本文献は章一郎より後世の古門富太が誌したもので一次史料ではないが、青木周蔵と章一郎の関係について新情報提示されている。

まず、章一郎およびその息子策郎についてであるが、その生没年は「富永家のこと。」に次のように記されている。

富永章一郎は左近の祖父で天保五年に生れ明治二十五年六十六歳位で歿しております左近の父策郎は嘉永五年生れ八十五歳で昭和十二年一月八日歿しております。⁸⁰



図一〇 古門富太誌「中津酢屋富永家のこと。」表紙（富永亮一氏蔵）。



図一一 同書巻末（富永亮一氏蔵）。

これによれば、章一郎は天保五（一八三四）年に出生、明治二五（一八九二）年五八歳にして没したとされ、また、息子策郎は一八五二年に生まれ、一九三七年八五歳で死去したと述べられている。章一郎の没年月日については異論がある。嶋通夫は明治二三（一八九〇）年五月に死去したという⁶²。しかしながら、筆者は古門富太説および嶋通夫説に疑問を禁じえない。

というのは、章一郎は生前儒学や洋学に優れており、死に臨み進んで献体を申し出た人物で、その遺体がコレラ流行の気運にあった明治二二（一八八九）年九月六日午前七時中津にて行われた解剖に用いられたことから、中津の医学史上にその名を遺している⁶²。ここから章一郎がその前日に亡くなったことが推察されるためである。筆者の説をさらに裏付ける史料として、前に掲げた青木周蔵書簡②に「本月『明治二二年九月』五日之哀訃」とあり、これによつて章一郎の没年月日は明治二二年九月五日と確定できる。

さて、章一郎および策郎と青木の関係は「富永家のこと。」に次のように記されている。

章一郎の世話になつた人に青木周蔵と言ふ人が明治頃になりまして、後に出世して外務大臣（当時外務卿）になりました、章一郎も息子の策郎翁も上京して其出世振りを見もし、又青木から大変な優遇を受けたと言ふ話があります、筆者古門富太（仁里）の兄林太郎が上京、東京高等商業学校在学中学資が足りないところに、叔父に当る富永策郎から青木の事を聞

き知り、早速林太郎は青木を訪ねて事情を語り、何年間か何分の学資を恵んでもらつたと言ふ話を最近ある筋から承知しました、さるにても青木のような人を章一郎が何の縁故で一時的恩を養つてあつたか、最近の事情も知り度いもので、章一郎と言ふ人の人柄もしのばれるしだいであります⁶³。

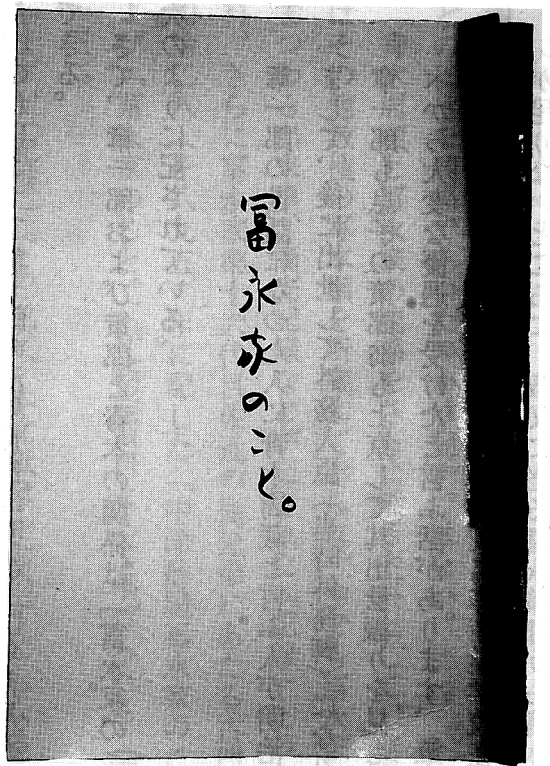
また、同じ古門富太が誌した「中津酢屋富永家のこと。」の一節「章一郎と青木周蔵」にも同様の話が見える。

章一郎の家に書生をして居た青木周蔵といふ人が、明治の初め頃出世して子爵外務大臣にまでなりました。後に章一郎は上京して東京見物をなし、厚いもてなしを得ております。筆者の兄古門林太郎は章一郎の徳によつて、何らかの学資の援助を青木周蔵から得たらしい話もありますが、確かでないから略します⁶⁴。

これらの二史料に見えることは、青木周蔵は中津に滞在していた或る時期、富永章一郎の家で書生をしていたこと、章一郎が上京した際には青木が手厚いもてなしをしたこと、筆者の兄古門林太郎が青木に学資を援助してもらつたかもしれない、ということである。ただし、古門富太の史料は人から聞いた話、すなわち伝聞によるもので一次史料でないことには留意せねばならず、また、記述自体も章一郎の没年月日を誤るなど、その信憑性にはやや疑問が残る。しかしながら、青木の中津滞在期のうち「誠求堂」を



図一三 同書巻末（富永亮一氏蔵）。



図一ニ 古門富太誌「富永家のこと」表紙（富永亮一氏蔵）。

出てからの残りの空白期間を推察するものとして、古門富太の二写本は示唆に富んだ有益な新出史料といえよう。

おわりに

現在まで青木周蔵の研究は、ドイツ公使、外務大臣など政治家として活躍した面に重点が注がれてきた。しかしながら、その素養をはぐくんだ中津滞在期については、『青木周蔵自伝』に記されたこと以外は全くの不明とされてきた。

こういった研究状況にあつて、中津市在住の富永亮一氏所蔵の富永家宛て青木周蔵書簡三通、富永家の「記録」、富永家第十六代目佐近の従兄弟である古門富太が記した「中津酢屋富永家のこと。」および「富永家のこと。」といった新出史料によって、手島物斎の私塾「誠求堂」を出てからの空白期間に、青木は少なくとも富永家に寄宿していた時期が存在していたことが明らかになり、加えて富永家の書生をしていた可能性が浮上した。今後は、青木周蔵が富永家に寄宿しながらどのように活動したのか、どのような人と接触したのかについて、さらに追究していく。

- 1 坂根義久校注『青木周蔵自伝』、平凡社、東京、一九七〇年。
- 2 坂根義久には、「青木周蔵の憲法草案について」(『国学院雑誌』第六六卷五号、一九六五年所収)、「青木周蔵論」(『日本外交史研究 外交指導者論』(『国際政治』第三三三号)、一九六七年所収)、「青木周蔵論 対英条約改正交渉と外交政略」(『季刊国際政治』第三三三号、一九六七年所収)、「青木周蔵の帝国大日本区県六道政規草案 一」(『国史学』第七七号、一九六八年所収)、「青木周蔵の在藩時代」(『国学院大学大学院紀要』第七号、一九六九年所収)、「青木周蔵の帝国大日本区県六道政規草案 二」(『国史学』第七七八号、一九六九年所収)、「青木周蔵の外相就任事情 第一次山県内閣の場合」(『国学院雑誌』第八〇巻五号、一九七九年所収)、「青木周蔵公使の対英条約改正交渉 下巻」(『日本史学論集 坂本太郎博士頌寿記念』、吉川弘文館、一九八三年所収)、ならびに『明治外交と青木周蔵』、刀水書房、東京、一九八五年といった一連の研究で、青木周蔵の生涯や外交政策とその背景などについて長年にわたって詳細な論考を加えている。
- 3 水沢周には、「青木周蔵 明治外交の創造」青年篇・壮年篇、日本エディタースクール、東京、一九八八〜一九八九年、および『青木周蔵 日本をプロシヤにしたかった男』上・中・下巻、中央公論社、東京、一九九七年といった著作があるが、いずれも歴史小説である。
- 4 坂根義久および水沢周以外の研究としては、加藤吉弥「鷗外と青木周蔵」(『比較文学研究』第一八号、一九七一年所収)、石川澄雄「シユタイン改革と日本」(『駒沢史学』第四七号、一九九四年所収)、堀口良一「長州出身者の反キリスト教論 木戸孝允・青木周蔵・島地黙雷の場合」(『帝塚山大学教養学部紀要』第四六号、一九九六年所収)、柳教烈「明治憲法制定期における華族土着論 青木周蔵の土着論を中心に」(『ヒストリア』第一五三三号、一九九六年所収)、市丸祥子「明治期の日独交流におけるドイツプロテスタント宣教 普及福音新教伝道会について」(『西日本ドイツ文学』第一五号、二〇〇三年所収)、大石一男「青木外相期の条約改正交渉 方針形成と国際環境」(『史林』第八七巻四号、二〇〇四年所収)などがある。

- ①「明治一九年四月二五日付富永章一郎宛て書簡」(一七、七×一四八、四糎、三枚続、楮紙)、②「明治二二年九月一〇日付富永策郎宛て書簡」(一八、九×九三、三糎、二枚続、楮紙)、③「明治二四年一月二日付富永策郎宛て書簡」(一七、八×一五九、五糎、四枚続、楮紙)の三通である。
- 6 「記録」(三一、〇×二四、四糎、四ツ目綴、写本、一〇〇丁、安政六年)、表紙に「安政六年己未九月吉日興復之」とあり。
- 7 古門富太誌「中津酢屋富永家のこと」(二二、一×一四、九糎、四ツ目綴、写本、二〇×二〇マス原稿用紙、三九丁、明治二八年二月吉日、貼紙あり)。
- 8 古門富太誌「富永家のこと」(二二、一×一四、九糎、二ツ目綴、写本、二〇×二〇マス原稿用紙、一〇丁、明治二八年二月吉日、貼紙およびメモ二種の挟み込みあり)。
- 9 前掲「明治外交と青木周蔵」、二〜五頁。
- 10 前掲「明治外交と青木周蔵」参照。
- 11 テルは本来青木研蔵の兄周粥の娘であり、研蔵の養女であった。結局青木家は梅三郎という養子をもらい、テルは青木がエリザベートと再婚したとほぼ同じ頃、山口県士族の井関忠一と再婚した。前掲「青木周蔵 明治外交の創造 青年篇」、二二頁。
- 12 前に述べたように中津藩滞任時の青木周蔵の名は、養子に入る以前の三浦玄明であったが、本稿では便宜上、以下呼び名を青木周蔵で統一する。
- 13 前掲「青木周蔵自伝」、四頁。
- 14 前掲「青木周蔵自伝」、四〜五頁。
- 15 前掲「青木周蔵 明治外交の創造 青年篇」、二七〜二八頁。
- 16 前掲「青木周蔵自伝」、六〜九頁。
- 17 手島をはじめとした自伝中に登場する人物については後章参照。
- 18 「大分県教育百年史」によると、鷹匠町にあり生徒数は八十人ほどで、天保年間(一八三〇〜一八四四)に設立され安政初(一八五四)年に廃止されたとあり、青木周蔵の自伝と記述が合致しない。大分県教育委員会編集事務局編『大分県教育百年史』第三巻、大分県教育委員会、一九七六年、三五頁。しかしながら『下毛郡誌 全』に、文久元年

(一八六一)に手島仁太郎がなくなった後、文久年間に弟の橋本忠次郎が「誠求堂」を継ぎ、それからは従学者が増え入門者千人ほどであったとする指摘がある。大分県下毛郡教育会編「下毛郡誌 全」復刻版、名著出版、東京、一九七二年、五〇六頁。「大分県教育百年史」には橋本忠次郎が継いでからのことは記載されておらず、これらを総合して考慮すると、青木周蔵の自伝の記述は誤りではないと考えられる。

前掲「青木周蔵自伝」、六〇九頁。

青地林宗「気海観瀾」、文政一〇(一八二七)年刊。桂川甫賢序。物理学科学書の刊本としては日本最初といわれる。

宇田川玄真(榛斎)「医範提綱」、文化二(一八〇五)年刊。解剖学的文献であるが、その内容は生理学、病理学にまで及ぶ。

前掲「青木周蔵自伝」、九頁。

前掲「明治外交と青木周蔵」、七〇八頁。

「御家中系図 嘉永三年改」(複写、中津市立小幡記念図書館蔵、請求記号五八〇・一八・四四)、一九〇四七頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。

山崎有信編「豊前人物志」(復刻版)、美夜古文化懇話会、一九七三年、

三八三〜三八四頁。

前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四七頁。

前掲「下毛郡誌 全」、六六五頁。

前掲「下毛郡誌 全」、六六五頁。

大江春塘「バスタード辞書」、奥平昌高、文政五(一八二二)年刊。

前掲「明治外交と青木周蔵」、七頁。

廣池千九郎編述「中津歴史」、鶴居村(大分)、一八九一年。

赤松文二郎編纂「扇城遺聞 郡誌後材全」、中津市立小幡記念図書館、一九三二年、四二八頁。

前掲「下毛郡誌 全」、七五五頁。なお、「丙」は筆者による記述である。

前掲「中津歴史」、二五二〜二五三頁。

前掲「扇城遺聞 郡誌後材全」、四二八頁。

村上玄水については、今永正樹「医亦従自然也 村上医家事歴志」、中津、一九八二年、一〇一〜一一〇、一一九〜一三二頁。川島真人「蘭

の泉中津に湧く」、西日本臨床医学研究所、中津、一九九二年、一六四〜一六九頁。ヴォルフガング・ミヒエル「村上玄水の略歴」(ヴォルフ

ガング・ミヒエル編「村上玄水史料」I、中津市歴史民俗資料館分館

村上医家史料館、二〇〇三年、一〜六頁所収)を参照。

川島真人「蘭学の泉中津に湧く」、西日本臨床医学研究所、中津、一九九二年、一八九〜一九〇頁。

前掲「蘭学の泉中津に湧く」、一八九〜一九〇頁。

前掲「下毛郡誌 全」、七五五頁。

前掲「扇城遺聞 郡誌後材全」、四二八〜四二九頁。

「村上医家史料館史料目録」二部三六。

「村上医家史料館史料目録」一部三。

村上玄水の天文学や医学などの科学知識、ならびにその他軍学、また、

村上家が蔵している文学書やランピキ(蘭引)などについては、吉田

洋一「解臍記并道原」(ヴォルフガング・ミヒエル編「村上玄水資料」

I、七〜三九頁所収)、拙稿「佛國曆象編」(同書、四〇〜一〇四頁所

収)、香沢宣賢「シーボルトと日本医学―村上玄水写本」(矢以勃児杜

験方録)を中心に(ヴォルフガング・ミヒエル編「村上玄水資料」II、

中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇四年、四七〜一二頁所収)、吉田洋一「江戸期中津藩村上家の軍学について」(同書、一三〜四三頁所収)、拙稿「村上玄水著『富国篇』とその背景」(同書、四四〜七〇頁所収)、W・ミヒエル「新旧西洋外科術が混在する地方蘭学者の史料―村上玄水写の「カスハル書口訣」を中心に」(同書、七一〜九七頁所収)、朝稲香子『豊前中津』にみる天保期の中津俳壇」(ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料』Ⅲ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇五年、一〜二二頁所収)、拙稿「村上医家史料館所蔵写本『老野子』における「有外子」・「老野子」とその背景」(同書、二二〜五九頁所収)、吉田洋一「村上家の軍学修養―『旺相門解』を素材として」(同書、五三〜七五頁所収)、W・ミヒエル、遠藤次郎、中村輝子「中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館蔵の薬箱及びランビキについて」(中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書四)、福岡、二〇〇五年を参照。

59 〔鷹〕大江医家所蔵 辛島医家旧蔵史料展」目録参照。

60 前掲「富永家のこと」、八丁表裏。なお、便宜上筆者が適宜読点をほどこした。

61 嶋通夫「ふるさとの歴史」、中津市刊行会、一九八五年、二〇六〜二〇七頁。

62 川寫真人「医は不仁の術 努めて仁をなさんと欲す」、西日本臨床医学研究所、中津、一九九六年、一一〇〜一一二頁。

63 前掲「富永家のこと」、九丁表裏。

64 前掲「中津酢屋富永家のこと」、三八丁表裏。

【付記】本稿を執筆するにあたり、中津市で銃砲火薬店を営む富永亮一氏は、青木周蔵の書簡三通ならびに富永家の「記録」、古門富太誌「中津酢屋富永家のこと。」および「富永家のこと。」といった、これまで未発表であった一連の貴重史料の利用許可をくださった。また、中津市歴史民俗資料館の保科眞氏には、青木周蔵が接触した中津藩の学者を探る上で関係資料を博搜していただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

【資料二】明治一九年四月二五日付富永章一郎宛て
書簡(一七、七×一四八、四纏、三枚続、楮紙)

本月十三日之貴書

両三日前接手無

恙御帰郷相成

候との賀々

尤船中より少々

眼痛ニ而御困却

被成候由災止此

事ニ御座候誠ニ先

達而御上京之節ハ

為何風情も無之

都合たり志ニ付

百里外ニ尋問セシ

甲斐も無之と嘸

々御後悔被成候

半氣之毒に奉存候

横須賀へ御出之節ハ

伊藤坪井両氏

共不存ニ而何故御不

如意之事而已有之

候由萬々氣之毒

ニ奉存候併ン鎌倉

地方へ御遊覽之
際二八萬端御都
合克敷珍貨

宝器等御一見

相成候由賀候

令息睦郎子身

上之義ハ萬々相含

居候得共目今之情

勢二而ハ強而東京

江呼寄候義却而不

都合二可有之候間

差当り縣地二而骨

折候様御説

論可被下候

御家内様へ可然御

敬意可被下奉頼候

先ハ拙答差出度

草々如此御座候

不一

周蔵

十九年四月二十五日

章一郎様

梧右

【資料三】 明治三二年九月一〇日付富永策郎宛て
書簡（一八、九×九三、三纏、二枚続、楮紙）

尚々老父母より可然御

悔可申進旨呉々も申付

候間可然御含可被下候

本月五日之哀計

昨日到来御親父様

御義久敷肺部之

疾二御罹り居被成候

処御保養不相叶

終二黄泉へ御旅行

被成候との御事

誠二驚愕いたし申候

最初御病氣二而有

之候事も夢二承知不

致候二付御見舞状

も不差進萬々遺憾

二存申候母上様其

他皆々様共嘸々御愁

傷之義と遠方より

洞察罷在申候 此上

ハ母上之御身二御病氣

不相起候様何卒々々

御孝養可相成候御

同人へは初二弔詞不申

進候間貴君より可然御

致意可被下候

先ハ御悔申進度

草々如此御座候

敬具

青木周蔵

式十三年九月十日

於東京認之

富永策郎殿

陳逸次子之可修学

科之義再度までも

縷々御申越相成一応

承知いたし候共

底大学校ニ於而規定

通之専門的諸学科

を修るニは先高等中

学之試考を経たる者

ニ無之ては不相成候処

逸次子は不幸ニも

高等中学之試験

を経たる人ニ無之候放

所謂高等なる専門学ニ

従事するわけニハ参

兼申候且来諭之

趣ニては数年間ヲ期シ

十分なる学資も御仕送

難被成致ニ推奉いた

し候間所謂早道のニ容

易なる一学科を修メ

さ勢一日も速ニ自分

之腕前ニ而糊口シ得る

人と相成候様勸諭

罷在申候要するニ府下

【資料四】 明治三十四年二月二日付富永策郎宛て

書簡（一七、八×一五九、五纏、四枚続、楮紙）

逸次子出京之節

御投与之書帖并ニ

十月廿五日附之細

書共正ニ領収時下、

秋冷弥増候得共貴

君并北堂君其外様

御益御多样之由

重量新賀ニ御座候

ニ滞在する中等之学生ハ
毎年百乃至百式十円

之学資を必需する振

合ニ御座候間逸次子ヲシテ

今より中学ニ入り遂ニ大

学門ニ進ミ終ニ規定之

試験ヲも経過セシムル事ニ

いたし候得者七八ヶ年

之内ニ学資金壹千円

ハ御仕送無之ては不相叶

候之ニ反シ前段ニ述置候

通り早道学問ニ而一科

目を修メシメ候得は式年

餘間ニ式百餘円之金子

有之候而事足可申候

貴君ニ於而は前述之事

情あるニも係らず別ニ御

考可有之故否サレハ右

早道学問ニ一契する云々

逸次子へ篤与可申聞候

間至急ニ何分之義御

申聞可被下候

北堂君へ可然御致意

可被下候

先ハ為其草々不一

周蔵

式十四年

十一月二日夜

策郎様